

風水害対策の基本は情報収集から



台風や豪雨は、襲来時期や規模をある程度予測することができます。日ごろから天気予報を気にかけ、注意が必要なときにはテレビやインターネットで最新の情報を収集するようにしましょう。

注意報は何か災害の起こる恐れのあるときに発令されます。警報は「重大な」災害の起こる恐れのあるときに発令されます。

台風



雨や風が強くなってから対策を始めるのは危険がともなうので、台風の接近が予測されたときには早め早めに準備をしましょう。

● 台風の大きさと階級分け

階 級	風速15m（毎秒）以上の半径
大型（大きい）	500 km以上～800 km未満
超大型（非常に大きい）	800 km以上

（気象庁による）

集中豪雨



集中豪雨とは、短時間のうちに狭い地域に集中して降る豪雨のことです。発生の予測が難しく、急激に状況が変化するため、少しでも異常や危険を感じたら、すぐに避難するようにしましょう。

● 台風の強さと階級分け

階 級	最大風速（毎秒）
強い	33m以上～44m未満
非常に強い	44m以上～54m未満
猛烈な	54m以上

（気象庁による）

● 風の強さと想定される被害

平均風速（毎秒）	予報用語	想定される被害
10m以上～15m未満	やや強い風	風に向かって歩きにくくなる。取り付けの不完全な看板やトタン板が飛び始める。
15m以上～20m未満	強い風	風に向かって歩けない。転倒する人が出る。ビニールハウスが壊れ始める。
20m以上～25m未満	非常に強い風（暴風）	しっかりと身体を確保しないと転倒する。風で飛ばされた物で窓ガラスが割れる。
25m以上～30m未満		立ってられない。屋外での行動は危険。樹木が根こそぎ倒れ始める。
30m以上～	猛烈な風	屋根が飛ばされる。木造住宅の全壊が始まる。

（気象庁による）

● 雨の強さと想定される被害

1時間の雨量（mm）	予報用語	想定される被害
10mm以上～20mm未満	やや強い雨	地面からの跳ね返りで足元がぬれる。長く降り続くときは注意が必要。
20mm以上～30mm未満	強い雨	傘をさしてもぬれる。側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。
30mm以上～50mm未満	激しい雨	道路が川になる。山崩れ、がけ崩れが起きやすくなり、危険箇所では避難の準備が必要。
50mm以上～80mm未満	非常に激しい雨	水しぶきで視界が悪くなる。地下に雨水が流れ込む。土石流が起こりやすい。
80mm以上～	猛烈な雨	大規模な災害が発生する恐れが強い。厳重な警戒が必要。

（気象庁による）

平常時の備え

家屋にも浸水や強風への備えが必要です。台風や豪雨が迫ってからの対策は危険なので、日ごろから周囲を点検しておき、自分で改善できないものは専門業者に相談してみましょう。

家屋のチェックポイント

屋根

- かもらやトタンのひび割れ、ずれをなくす
- アンテナをしっかりと固定する

ベランダ

- 強風に飛ばされそうなものは置かない

窓ガラス

- ひび割れ、破損、ぐらつきがないか確認

雨どい

- つなぎ目はずれ、塗料のはがれがないか確認
- 土砂や落ち葉で詰まらせないように掃除しておく

雨戸

- がたつきがないように補強する

屋外の設置物

- プロパンガスのボンベはしっかりと固定する

過去の被害を参考にしよう

風水害・土砂災害の被害は、地形と深い関係があるため、過去の被害の情報が役立ちます。昔から住んでいる人などに過去にどのような被害があったのか聞いてみましょう。また、ハザードマップで事前に危険個所を把握しましょう。

こんな土地はこんな災害に注意

- 浸 水 沖積地、河川敷
- 土砂災害 造成地、扇状地、山地



被害が心配されるときには

風が強いとき

屋内では



風圧や飛来物で窓ガラスが割れ、破片が吹き込む危険があります。内側からガムテープを×にはり、カーテンを閉めておきましょう。

路上では



看板が飛んだり、街路樹が倒れたりする危険があるので、近くの建物の中に避難しましょう。ただし、大雨をとまなう場合には、地下室や地下街には逃げ込まないように。

大雨のとき

屋内では

床下・床上浸水の危険があります。家具や貴重品などを2階へ移動させましょう。



車の運転中は



豪雨で視界が悪く、操作ができなくなる危険もあります。水が少ない場所を選びながら、ゆっくりと高台へ避難しましょう。浸水でエンストしたときには、無理に再始動させるとエンジンを傷めてしまいます。

河原では



急な増水や土砂災害の危険があるので、川などには近づかず、すぐに避難しましょう。そこで雨が降っていないくても、サイレンなどの警報が聞こえたらすぐに逃げてください。

遠賀川中間観測所の水位がはん濫注意水位（3.70m）を超え、その後も水位の上昇が見込まれる場合には、なかまコミュニティ無線で「遠賀川が増水しています。注意してください。」と放送し、注意を呼びかけます。

避難に関する情報に応じた行動を

●避難準備（要援護者避難）情報

避難するのに時間がかかる要援護者（高齢者や障がい者など）は、指定された避難所への避難行動を開始する。要援護者の避難を支援する人は支援行動を開始する。

●避難勧告

避難対象地域内のすべての住民は、指定された避難所への避難行動を開始する。

●避難指示

避難中の住民は、避難をただちに完了する。まだ避難していない住民は、ただちに避難行動に移る。もし避難する余裕がなければ建物の高所に移るなど生命を守る最低限の行動をとる。

土砂災害は前兆に注意を

土砂災害は発生すると大きな被害を引き起こします。長雨や大雨のときに次のような現象を確認したら、早めに避難し、防災機関に通報しましょう。

がけ崩れ

- がけからの水がにごる
- 地下水やわき水が止まる
- 斜面のひび割れ、変形がある
- 小石がぱらぱら落ちてくる
- がけから音がする
- 異様なにおいがする など

土石流

- 近くで山崩れなどが発生
- 立木の裂ける音や岩の流れる音がする
- 雨が降り続けているのに、川の水位が下がる
- 川の水がにごったり、流木が交ざる など

地すべり

- 地鳴り、家鳴りがする
- 根の切れる音がする
- 地面が振動やひび割れをする
- 家やよう壁、道路に亀裂が入る
- 家やよう壁、樹木、電柱が傾く など

※大雨で土砂災害の危険性が高まったとき、自主避難の判断の参考になるよう「土砂災害警戒情報」が発表されることがあります。ただし、情報が発表されていなくても、普段と異なる状況に気づいたらすぐに避難してください。

危険を察知したら、とにかく**早期の避難**を心がけてください

風水害からの避難の注意点

動きやすく安全な服装で

ヘルメットや防災ずきんで頭を保護。靴は長靴よりもひもでしめられる運動靴に。

深さに注意

歩行可能な水深は、約50cm。水の流れが速ければ、20cm程度でも要注意。無理をせず、高所で救助を待つ。



隣近所で声を掛け合い、集団で避難する

単独行動はしない。はぐれないようにお互いの体をロープで結ぶ。

災害時要援護者の安全を確保

高齢者や傷病者などは背中に背負い、子どもには浮き袋をつけさせる。

足元に注意

水面下にはマンホールや側溝などの危険が。長い棒をつえ代わりに突き、確認しながら歩く。



命を守る最低限の行動を

風水害からの避難は、避難所などへの「水平避難」か、階上への「垂直避難」のいずれかが基本です。危険が切迫している場合は、指定された避難所への移動だけでなく、命を守る最低限の行動が必要な場合もあります。



たとえば次のような状況で、建物倒壊の危険がないと判断される場合は、自宅や近隣建物の2階以上へ緊急一時避難し、救助を待つことも検討してください。

- 避難路上の危険箇所がわかりにくい
- ひざ上まで浸水している（50cm以上）
- 浸水は20cm程度だが、水の流れが速い